

海を渡る花嫁への一考察 (3)

ーバーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通してー

嘉 本 伊都子*

要 旨

2016年にハワイ大学出版会から上梓されたバーバラ・川上(旧姓 オヤマ)著“Picture Bride Stories”の研究ノート・シリーズの最終回(3)である本稿は、沖縄からの写真花嫁に焦点を当てる。琉球王国は明治政府にハワイ王国はアメリカの支配下に入った。バーバラは1909年から1923年にハワイへ写真花嫁としてきた一世のライフ・ヒストリーを丁寧に聞き取っている。本稿は、沖縄からハワイへ渡った4人の定位家族に着眼し、内地からの花嫁と比較検討することで、バーバラ川上の研究がいかに貴重であるかを明らかにしていく。

キーワード：ハワイ、バーバラ・川上、沖縄、写真花嫁、定位家族

はじめに

本稿は本誌21、22号に掲載された「海を渡る花嫁への一考察ーバーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通してー」(1)(嘉本、2019)、(2)(嘉本、2020)の続編であり、この(3)で完結する。本稿における写真花嫁とは、19世紀末から20世紀前半、ハワイや北米へ出稼ぎに行った日本人男性が郷里の女性と写真を交換し、花婿の写真を手には海を渡った花嫁をさす。

かつての写真花嫁たちに1980年代半ばにインタビューしたBarbara F. Kawakami著“Picture Bride Stories”(2016)を紹介しながら、考察していく。再掲した図表1「バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト」は、ハワイに到着順に花嫁たちを並べかえたものである。バーバラ・

* 京都女子大学 教授

川上（以下、バーバラと表記）は*欄で示したようにB01、B02とナンバリングした順番に「物語」を執筆している。本稿では、頁数などの表記は煩雑さを避けるために、例えばB06のナカソネ・ウシイであれば（花嫁番号、原著の頁数）、すなわち（B06, 107）と表記する。“Picture Bride Stories”（2016）からの引用は、すべて嘉本による訳である。誤訳等あればご一報いただきたい。

バーバラ・川上の『ハワイ日系移民の服飾史』（1998=1993）に訳者の香月洋一郎がバーバラ本人に確認して判明した範囲で、固有名詞の漢字が表記されている。よって、判明している場合は漢字表記を本稿でも取り入れた。例えば、B06ナカソネ・ウシイは仲宗根ウシイ（川上、1998：46-48）と表記する。

図表1からわかるように、B01の熊坂カク以外は、花嫁がハワイへ到着した順番に「物

語」が並んでいる。原著にはナンバリングもなく、花嫁の名前、花嫁を象徴するフレーズ、出生年と没年、出身地、ハワイ到着の年月日が各花嫁の「物語」が始まる冒頭にはそえられている。沖縄からの花嫁は、B06仲宗根ウシイ、B14安里カマ、B15ヒガ・カナ、B16玉城ウシの4人で、仲宗根ウシイだけ19世紀末の1897年生まれであるが、1920年代初頭にハワイへきた3人は1901~1904年出生コーホートで、16人の花嫁全体からみても「最も若い」出生コーホートである。

本研究ノートは、移民史としての写真花嫁ではなく、バーバラが丁寧に聞き取っている写真花嫁が生まれ育った定位家族に焦点をあてることで、20世紀初頭の庶民の生活を浮き彫りにし、なぜ海を渡ったのかを考察する。最初に4人の沖縄の花嫁の定位家族を紹介する。

図表1 バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト

	*	来布年	名前	旧姓	出身地	生年・享年
1	B02	1909	Hisa Kawakami	Okabe	福岡県朝倉郡長者町	1889-1978
2	B03	1911	Soto Kimura	Shigehiro	山口県玖珂郡岩国市	1892-1990
3	B04	1913	Tatsuno Ogawa	Aoyama	広島県神石郡さんまんまち	1892-1991
4	B05	1913	Tei Saito	Shida	福島県信夫郡鎌田村	1892-1989
5	B06	1914	Ushii Nakasone	Shimabukuro	沖縄県中頭郡美里村	1897-1990
6	B07	1915	Fuyuno Sawai	Tani	広島県双三郡和田村	1895-1991
7	B08	1915	Kishi Oki Tsujimura	Oki	広島県安佐郡可部村	1896-2002
8	B09	1916	Kikuyo Fujimoto	Murashige	山口県岩国市	1898-2008
9	B10	1916	Shizu Kaigo	?	山口県いこち村（伊陸か？）	1896-1998
10	B11	1917	Haruno Tazawa	?	福島県安達町（+夫新潟）	1897-1994
11	B12	1918	Taga Toki	Inokuchi	熊本県八代郡	1901-1991
12	B13	1918	Ayako Kikugawa	Murayama	熊本県鹿本郡米野岳村	1899-1997
13	B14	1920	Kama Asato	?	沖縄県宜野湾市普天間	1904-1989
14	B01	1922	Kaku Kumasaka	Konno	福島県伊達郡湯野村	1899-1987
15	B15	1922	Kana Higa	Nakao	沖縄県国頭郡羽地村	1901-2001
16	B16	1923	Ushi Tamashiro	Kakazu	沖縄県那覇市国場	1902-1986

*バーバラ・川上は、B01から昇降順に執筆している。

（Kawakami, 2016）をもとに嘉本作成（嘉本、2019：70）より引用（1部修正）

1. 沖縄での定位家族

B06 仲宗根ウシイ（沖縄県中頭郡美里村）

B06仲宗根ウシイ（B06, 104-120）は沖縄県中頭郡美里村¹（現在沖縄市）で、男1人女6人きょうだいの最後から2番目の子として、1897（明治30）年に生まれた。同じ美里村から自由移民時代に来布した同じ苗字の仲宗根なえに、鳥越皓之がインタビューしているので後に紹介したい。ウシイの両親は農家で町からは遠い小さな村で暮っていた。7歳のときに子どものいない、おじ・おば夫婦のところへウシイは行かされている。家が近かったので他のきょうだいとも仲良く育った。6人の女の子のうち、長姉、ウシイ、下の妹だけが小学校の6年を卒業したという。家が女の子の労働を必要としたので、4年生まで続けられる女子はほとんどいなかった。

子どものいない親戚夫婦のところへ、子どもを養子にやることは内地でも頻繁に行われた。内地の規範からすると、次にそのおじ夫婦は婿養子を彼女に迎えさせる。だが、ウシイの交換用の写真を撮影させたのは、そのおばである。ウシイは11歳も年上のハンサムな写真の男性、松吉のところへ写真花嫁としてハワイへ行く決心をする。しかも、彼女は松吉が村を離れたとき松吉にはガールフレンドがいたことを覚えているという。

子どものいない親戚に養子にやられても、ハワイへ写真花嫁として行っている。婿養子をさらに夫にして家を継ぐためではないようだ。沖縄もこの時期は兄弟姉妹数、子どもの

人数は多く、養子の戦略は使われるのであるが、本土の規範パターンとは異なる戦略が後述するように他の花嫁でも確認できる。

性急な娘の決断に驚いたのは実母であった。「ウシイ、11歳も年上の方と本当に結婚するの？ハワイへ結婚しに行けば、どんなにたらくても離婚もできないのよ。あなたの姉妹は皆一度しか結婚していないし、1人の夫としか暮らしてないでしょ、知ってる通り」（B06, 108-109）。夫になる松吉も、松吉の父と実母は恋仲で、松吉を身ごもっていたが、両親の反対にあい、結婚はできなかった。父は再婚したのだが、継母がスペイン風邪で死去し、1914（大正3）年急遽松吉は美里村へもどり、ウシイは後述するように結婚式を沖縄であげることになる。松吉の背が低いことにはがっかりした。

義母が死去し、義父は一人になる。夫の異母妹も別の村にいるのでウシイは一人にしておくわけにはいかないと思ったのだそうだ。よって、松吉と一緒にハワイに行ったわけではない。小学校まで出させてくれたおじ・おば夫婦のことは考えないでいいのだろうかと疑問がわくが、何もそれについては記述されていない。義父がハワイの息子のところへいくようにとすすめてくれたので、三か月後にウシイも神戸経由でハワイへ発った。

B14 安里カマ（宜野湾市字普天間）

B14安里カマ（B14, 236-252）の旧姓タマシロ・カマは宜野湾市字普天間に1904（明治37）年に生まれた²。現代で普天間といえ

1) Nakagumi-ken (B06,104, 105) とあるが、Nakagami-gun (中頭郡) の誤記と思われる。

2) B14のカマは、236頁には1904年3月3日生まれとあるが、239頁には3月5日にタマシロ・カマとウサの間に生まれたとある。

米軍基地を連想するが「権現さん」が普天間の象徴であったようだ。普天満宮は、琉球八社³の一つで、遠くからもお参りに来たという。カマを含め女の子3人だったので、養子をとった。小さいころは祖母が面倒をみてくれ、小学校は8年まで通った。両親が16歳のカマをハワイの砂糖プランテーションで働く安里カメイに嫁がせるためカマの結婚写真を撮った。「両親と夫の両親が決めた結婚で、仲人はいませんでした。私には一言も聞きませんでした。・・・私には選択権はありませんでした。どんなところにいくのか、どんな男なのかも知りませんでした。小さな村でしたからお互いのことは知っています。彼がハワイへむけて旅立ったときのことを少し覚えていますが、どんな気持ちだったかなんて覚えていません」(B14, 242)とカマは述べている。

母は「何人子どもを産もうとも、夫なしでは沖縄に帰ってくるな」(B14, 243)と旅立つ前に娘に言った。その言葉の背後には、当時多くの男性が妻と子どもを村に残して、送金をまったくしないケースが多かったからだ。結局は姑につかえ、畑仕事のほかにたくさん家事など使用人の扱いを受けるからであった。娘に辛い思いをさせたくない親心ではあった。両親は、ハワイはパラダイスで通りは金で舗装されているとか、金のなる木があると言っていた。この言説は内地の花嫁からも聞き取れるが、沖縄の人々も「ハワイ熱」に煽られていたことがわかる。

一方、夫の母である姑は「子どもが3人になったら、(沖縄に)帰ってきておくれ」(同)

と嫁に懇願していた。夫のカメイの定位家族については全く触れられていない。

B15 ヒガ・カナ (沖縄県国頭郡羽地村字川上)

B15ヒガ(比嘉か?)・カナ(B15, 253-269)は沖縄県国頭郡羽地村字川上(現在名護市)出身で、父ナカオ・ジロウと母ヒガ・カマドの間に1901(明治34)年生まれた。マツ・ババンこと父方祖母が、息子の妻を選んだ。しかも、息子より13歳も年上である。その理由をカナは「嫁選びは畑仕事、砂糖黍を育て、野菜や豚を養うよく働く女性を見つけることでした。大部分は女性がするので、健康でよい女性が必要だったのです」(B15, 256)と説明している。父が24歳のときカナは生まれ、妹も生まれるが、カナが3歳のとき父が畑でハブにかまれて死去する。妹のナエ・ナベ・ナカオは、母とともに母の実家に帰され、カナのみマツ・ババンのもとで育つ。息子の死去にともない、養子を取り、その養子に貧しい家の娘と結婚させた。ジロウという父親の名前からすると次男だと想定できるが、長男にも何かあったのかもしれない。この家でのマツ・ババンの地位はゆるぎないものがある。

この養子と暮らすことがカナには耐えられなかったようだ。養子はその立場を利用して全く仕事をしないで、かわりにカナがやった(B15, 256-7)。この養子と貧しい家の娘の間に子どもができたかどうかは書かれていない。息子の血をひいているのはカナである。内地の習慣であれば、カナに婿養子をとって、家を継がせようとするのではないかと思うが、

3) 琉球王国から特別な扱いをうけた社。波上宮・沖宮・識名宮・普天満宮・末吉宮・安里八幡宮・天久宮・金武宮の8つの神社の総称。

そのカナをハワイへ嫁がせる。カナは養子からは逃れたが、ハワイでは夫の姉の支配下に置かれることになる。しかも、弟は姉に借金をしており、その謝金は妻であるカナのものでもあると義姉はいう。マツ・ババンといい、沖縄でも家庭内の決定権は女性のほうにあるのではないかと思われるぐらい、強い。

マツ・ババンは沖縄に戻ってくるようハワイへ手紙を何度も書いてきた。マツ自身が字を書けたかどうかは、記述がない。マツは、那覇にあった内地の着物を輸入していた呉服屋で、絹の美しい銘仙、羽二重の羽織を買い、敷布団までカナに持たせている (B15, 260)。マツ・ババンにこのような財力、さらに家庭内での権力があつたのは、後述するように「織る技術」があつたからであろう。

B16 玉城ウシ (那覇市国場出身)

B16玉城ウシ (B16, 270-280) は、那覇市国場出身で、1902 (明治35) 年生まれで姓をカカズ (嘉数か?) といいた。生まれ育つた家は貧しい家としては普通であり、なにもそれで恥入ることはなかつたという。家の壁は頑丈な竹でできており、風通しがよく快適であつた。一方、夫が働くビッグ・アイランド (ハワイ島) のWaiakeaにある砂糖黍畑の中のキャンプの家に着いたとき、「人間が住むところじゃない!」とウシはうろたえた。

祖父母も農家で、自分たちの土地を持ち、両親も同じ村の生まれで「あの頃は、親が決めた結婚で、同じ村から経済的な理由で花嫁を迎えること好んだものです。父は母より4歳若かつたです」(B16, 270) と、息子よりも年上の女性を嫁に迎えている。なぜ貧しい家でも土地を持つことができたのかについては、

沖縄の旧慣である地割制度との関連で後述する。ウシも、両親も彼らの意思で自由に婚姻相手を選んでいない。

祖父は、母親を毎朝4時に起こした。母は畑で働き家事もこなした。村の農家の息子と結婚したら、こんな生活を送らなきゃいけないのか、ごめんだ (B16, 272) とウシは思っていた。20歳になった頃、母方の男性の従兄弟がお見合いの話を持ちかけてきた。玉城ジントロウは母方のいとこの一人で仲がよく、どちらかというとなニキとか、頼れるおじさんというところだった。なぜなら33歳で13歳も年上であつたからだ。

義理の親族に支配されつづける農村の妻として生きるつもりがなかつたウシには、もう一つハワイに行く理由があつた。彼女の父が大金を稼ごうとハワイに行ったものの、帰らぬ人となつていた。沖縄らしいのは、その父の魂が、おばの体をかりて「私の魂はまだハワイにいます。どうか安らかに眠らせておくれ」(B16, 273) というメッセージを何度も送ってきていたことである。父の魂に呼び寄せられるように、13歳年上の夫へ、外国の地での贅沢なくらしを夢描き、嫁ぐことを決心した。

父だけでなく、たった一人の兄も村の若者と一緒にブラジルに行っている。1923年にハワイに行く前に、「兄とはとても仲が良く第一次世界大戦後にブラジルの兄を訪ね、楽しかつた」(B16, 271) と述べており、唯一海外経験のある花嫁である。ウシが実家を婚出したら、祖父母と母だけが残る。養子をとつたか、定かではない。このような状況でも、ハワイに娘を嫁がせる。祖先のお墓を守り、畑を継続していくことは大切だと書かれるのである

が、内地の「家」規範とは異なる規範が、彼女たちの定位家族に対する聞き取りから判明する。

2. 国家主導型の近代化と沖縄移民

2. 1. 中頭郡美里村出身の仲宗根さん

定位家族のみを紹介すると、大きな時代の流れのなかに彼女たちがいたことを見失う。特に国が滅亡するという意味では、琉球王国もハワイ王国もほぼ同時期に憂き目にあってきたことが注目されよう。研究ノート(2)で触れたように、明治政府とハワイ王国が、移民の約束をして排出した官約移民時代は、1885年からハワイ王国が滅亡する1894年までである。1879(明治12)年のいわゆる廃藩置県で沖縄県となり明治日本の支配下に琉球は置かれた。実質的には日清戦争で、それまでの琉球王国との関係が深かった清国が日本に負けた1895年の後であった。それまでの旧慣温存政策から「国家主導型の近代化」が始まる(鳥越、2013; 62-73)。琉球王朝の実質的な崩壊後に、バーバラがインタビューした花嫁が海を渡ったことになる。

本土とはすこし時間差がある沖縄からの移民は、ハワイ王国が滅亡した後の1900年の自由移民時代に始まる。ほぼ同時期に始まった明治政府による上からの近代化が、沖縄移民をより輩出することとなる。写真花嫁たちの証言を補足、分析することで、いかに庶民の暮らしのなかに「近代化」が入り込んでいったかを明らかにしたい。

鳥越皓之は「自由移民の人たち数人から聞

き取りをしている。沖縄自由移民からの直接的な生の言葉は、ここで記録するものが、きわめて稀な歴史資料として残る可能性が高いので、意識してやや詳しく紹介しておこう」(同; 93)とって紹介している一人が仲宗根なえである⁴。「私は沖縄県中頭郡美里村(その後、合併してゴザ市になる)に一八八八(明治二一)年に生まれました。私の生まれた村では学校に行く人はいなくて、私は二年間行ったので字が書けます。日本丸に乗ってハワイにやってきました。それが私が一九歳のときです。神戸からハワイまで二日かかりました。一九〇七年のメイ(May 五月)です。ハワイは女がおらんから、兄さんがハワイに行こうというので、オーライと言ってやってきた」(同; 95)と、答えていることからわかるようになえは「写真花嫁」としてきたのではなく、自由移民としてまさに兄と「働き」に来た。最初はオアフ島のエヴァ耕地(一世はプランテーションのことを「耕地」という)で働いていた。同じ苗字で同じ美里村出身者B06仲宗根ウシイにバーバラがインタビューしている。ウシイは、1914(大正3)年にハワイへ到着した。なえはウシイよりも10年ほど年長で、7年ほど早くハワイへ自由移民として来ている。

写真花嫁が本格化するのが1908年であるから、女性が少なかった耕地で、なえは複数の男性から声を掛けられた。しかし、沖縄では親から「男と道であっても話をするなど言われて育ったので、つきあいはありませんでした」(同; 97)とっている。エヴァ耕地には女性が3人しかおらず、その1人がつきあっ

4) 社会学者の鳥越皓之は『沖縄ハワイ移民一世の記録』(中公新書、1988)においては当時の一世が存命中ゆえに仮名を使用しているが、歴史的存在になってからの『琉球国の滅亡とハワイ移民』(吉川弘文館、23013)では実名で記されている。

ている男性に字が書けるなえが代筆して手紙を書き、3人の名前を並べたら、なえだけに手紙が来るようになった。「来てもいいか」と何度もいってくる男がいた。アイエア耕地で働いている人だったが、仕事の後の夜になんどもやってきた。結局、その男性と結婚し、2人でハワイ島のバビー耕地、カウアイ島のワイルアに移っていく。

沖縄生まれの鳥越氏は沖縄の文化、社会に造詣が深い。仲宗根なえにもモーアシビーについても聞き取ってほしかった。なぜなら美里村出身のウシイがモアソビ (moasobi) についてバーバラに語っているからである。若い男女が道端で歌い、踊る風習であるが、なえは男とのつきあいはなかったと語っている。明治時代の終わりごろの風習にはなかったのであろうか。毛遊びについては後述する。

1918年～19年ごろ流行ったスペイン風邪は、いまでも思い出しても恐ろしい思い出である(同; 97-98)となえは語っている。スペイン風邪は、ウシイの「結婚式」が沖縄で急遽執り行われることになるなど、影響を与えている。

2. 2. 食生活と地割制度の崩壊と移民

1907年にハワイに自由移民として来た仲宗根なえは、「沖縄ではコメとイモをつくっていましたが、イモのよいものは売りに出していたのでじぶんたちは『こまいイモを食べよった』。それに対して、ハワイではコメが食べられるので、ごはんだけはハワイはよかったです。」(鳥越、2013; 96)と述べている。

バーバラがインタビューした4人のなかの1人は、沖縄の米どころで育ち、白米を食べていた。だが、あとの花嫁たちは主食はスイ

ート・ポテト(紫イモ、紅芋などあるが具体的に何を差すかわからないのでこの表記にしておく)で紫のイモを朝、昼、晩、食べていた。畑もスイート・ポテトと砂糖黍がそれぞれの畑で栽培され、収穫期になると村人がお互いに助け合った。それは無償で助け合っている。イモと砂糖黍の他についてまとめておこう。

第二次世界大戦で権現様が焼かれなかったことに感謝した普天間のカマは、父親は体が丈夫なほうではなく、だれかに馬や牛を使って仕事をさせなくてはならなかったが、タマシロ家にはカマを含め女の子3人だったので、養子を取った。母親も大豆を育て豆腐を売っていたのでお金には困らなかったという。牛や馬は砂糖小屋で、朝から午後3時まで砂糖を絞りだしていた(B14, 239-240)。

父が母より4歳若いウシも、兄も祖父母も2品の他にアライモ(日本のタロ芋)、などいろいろな野菜を育てている。イモを市場に運ぶときはボキという藁で編んだ入れ物に入れ、10キロから20キロのイモを頭にのせてウシは運んだ。紫のイモが常食で朝昼晩たべ、イモの葉や茎もたべるといふ。12歳になるまでは毎朝馬が食べる草を刈って与え、14歳になると、普通の農家の畑にいて朝から晩まで働いた(B16, 270-1)。後述するように頭で物を運ぶ「旧慣」は改めるよう指示がでていますが、改まっている気配はない。

国頭郡羽地村字川上出身のカナは白米を食べていたが、ムラの人々は自分の土地にイモと砂糖黍を植えた。「村の人々は皆助け合いましたよ。とくに砂糖黍の収穫のころはね。女性が切って、掃除して、牛の餌にしました。男は、切りにくい茎を切って、近所の工場へ

運びました。そこでキビ汁を抽出して、生の砂糖をつくるのです。黒砂糖を瓶の中でつくるのです。おやつに黒砂糖をおにぎりのようにして食べたものです。「一年はもちました」(B15, 257) と話している。沖縄の人々は、布哇のプランテーションではよい労働者として知られていた。このように沖縄で砂糖黍を育てた経験があるからだ。花嫁のなかでもカナだけ白米を沖縄で食べていた。ごはんの上に味噌を塗って、お弁当にもっていった。カナの生まれた羽地村は沖縄の米どころである。

鳥越は、同じ羽地からの移民、「大いなる正直」者として金城徳勇(鳥越、1988: 136-170)、本名鳥袋長勇(鳥越、2013: 142-153)を紹介している。1897(明治30)年生まれで、18歳8か月でハワイにきた。出身は、ヒガ・カナと同じ羽地村であるが、宇田井等である。「沖縄のわしのところは、^{はねじたんぼ}羽地田圃というて、稲どころ。沖縄一の田圃のところよ。見渡しても、遠くの牛が歩いているのかどうかわからんぐらい広い。」(鳥越、1988: 139)という鳥袋さんの家の田は2500坪ぐらいしかなかったという。さらに畑が9つあった。カナの川上から羽地大川を渡れば田井等であるので、米どころだったことが白米を食べることができた理由であろう。多くの沖縄からの移民は、ハワイで白米が食べられることには感謝しているぐらい、沖縄で白米を食べられる家は少なかったと思われる。

この羽地村(1908年の特別町村制施行後、1970年に名護市に併合されるまで羽地村)は、沖縄の中でもハワイ、そしてブラジルに村民を多く輩出したことで知られる。地理学者石川友紀は『日本移民の地理学的研究: 沖縄・

広島・山口』(1997)のなかで羽地村を、沖縄の移民母村の代表的な5村(金武、勝連、^{なかくすく}中城・西原)のうちの一つとしている。なぜ白米が食べられるほどの裕福な村から移民が多く輩出するのであろうか。

国頭郡旧羽地村は沖縄本島北部の東シナ海に面した平野を持つ裕福な村である。同村においても、1899(明治32)年の地割制廃止以後は多数の移民を見るようになった。その理由は移民するに際し、私有地となった土地を売却し、あるいは抵当にして旅費の捻出が可能になったからである。移民先も当初はハワイであったが、1908年(明治41)年にブラジルへの契約移民が開始されると、同国への移民が圧倒的に多くなった。(石川、1997: 317)

石川によれば、1899(明治32)年4月1日施行の沖縄県土地整理法により、最後の地割が旧慣にしたがって行われた。これまでは、沖縄では村の土地は個人のものではなかったのだが、旧慣に基づいた地割制度を利用して、各自の土地所有権が確立し、私有地となった土地を売却することが可能になった。こうして海外渡航費用を手にした沖縄の人々が海を渡っていった。その水田も次第に砂糖黍畑へと変化していったという。「土地をもっていた」と花嫁が語る背後には上からの近代化があり、それが沖縄移民の輩出につながっていたことがわかる。

2. 3. ストロー・ハットと芭蕉布の帯

学校が好きではなかった普天間のカマは、

畑で働くよりストロー・ハット、麦わら帽子を編むことで家計を助けた。1910年代後半のことであろう。街から二人の内地のセールスマンがやってきて、麦わら帽子を編む糸を売りにきた。妹と二人で、2, 3個の帽子を1週間で完成させた。Lサイズの帽子だと2.5ドル、男の子の帽子は1.5から1.65ドル稼ぐことができた。1週間で5~6ドル稼いだ。お金は全部母親に渡した。ハワイで暮らしてきたせいか、日本のお金でもドルで答える花嫁は多い。カマの母はよく「女の子たちは、畑に出たくないから、帽子を編み続けるのよね」(B14, 240) といって大雨の日など、余分な人手がいるときだけ母親は娘たちに畑での仕事を頼んだ。母は一日50セントで畑仕事のための男性を雇えるなら、女の子たちに帽子を編ませたほうがよい収入になると考えていた。朝7時に起きて夜9時に寝るまでずっと働いたという。帽子を1個仕上げたら、2, 3人の男性を畑仕事に雇える (B14, 240)。

『日本人のすがたと暮らし』によると、「エクスアドル原住民のかぶりものだったパナマ帽が、世界的に人気になったのは19世紀末のこと、すでに漱石の『吾輩は猫である』(1905)のなかで、高価な帽子としてとりあげられている。カンカン帽は若者のかぶるもの、パナマは年輩の紳士のもの、というところ。南米産の本パナマの外に、南洋パナマ、マーシャルパナマ、台湾パナマなどがあって、素人ではなかなかみわけがつきにくかった」(大丸・高橋、2016; 193) とある。ストローハットは模造パナマ帽ではないかという推測ができる。安里カマと同じ1904年生まれで、首里尋常小学校女子部を卒業した後「家内工業のパナマ帽(子)あみの仕事にも従事した。一日

一円の賃金であった」とホノルルでインタビューに答えた伊渡村千代の例を石川友紀は紹介している(石川、2013; 52)。

この帽子を編むことについて那覇市のB16玉城ウシは、畑での重労働のほかに「areneba(椰子の葉)」(B16, 272)を使って麦わら帽子を編み家計の足しにしたという。帽子を編むというのは、内地からの写真花嫁からは出てこなかった証言である。カマは芭蕉布を織るよりも、帽子を編む方が性に合ったようである。「アレネバ」とウシが答えていたものは、阿旦(檀)というタコノキ科の亜熱帯常緑灌木でパイナップルのような実がなる木の葉っぱ、^{あだんば}阿旦葉でつくられた阿旦葉帽子だと思われる(『沖縄県史 経済3』「帽子製造について」; 563-585)。

四方田雅史は「模造パナマ帽をめぐる産地間競争」のなかで戦前期の台湾と沖縄を比較しており、両産地の帽子生産量を図(四方田、2003; 53の図1)にしている。その図からカマやウシが編んでいたと思われる1916年から1919年にかけて2000個を超え、沖縄ではもっとも盛んに生産されていた時期だと判明する。模造パナマ帽とは、様々な材質で造られた帽子の総称である。本場のパナマ帽子は、トキヤ草で造られる。麻、麦、など他の素材で作られたものはストロー・ハットというようだ。よって、ストロー・ハットの訳語は模造パナマ帽でもいいのであるが、そのまま麦わら帽子としておく。1914年にハワイへ行った仲宗根ウシイは麦わら帽子については述べていない。おそらく1910年代後半に換金性の高い麦わら帽子が村の娘たちにも内職として入ってきたのではないだろうか。さらに、そのお金で雇う、賃労働という発想自体が、プ

ランテーションからきているのかもしれない。

内地の花嫁の何人かは、自ら反物を織り、裁縫をして着物を作っていた。バナナの葉の繊維で編んだ芭蕉布という幅の狭い帯を織ることを10歳までに学んだ (B14, 240) と証言しているのは安里カマ一人だけである。帯であって、着物とは言っていない。夏は芭蕉布でこしらえた着物を着るとはあるが、その着物を縫っていたかはわからない。さらに、難解な芭蕉布の織り方をマスターするよりも、麦わら帽子を作って稼いだお金で着物を買うようになったという。麦わら帽子は換金性が高く、内地との格差を利用したビジネス構造である。これが、伝統的な芭蕉布の織り方を村から衰退させる要因になったのではないだろうか。

内地では母親が、織りの名手であったという語りがあったが、沖縄ではマツ・ババンと呼ばれるカナの父方祖母が織手としてムラの人々から尊敬を集めていた。「マツ・ババンは、幼いころから、特別な織りと染色を訓練されていました。マツ・ババンは、沖縄の着物や帯でも最も美しいものを織ることができました。彼女は本当に熟練していたのです。彼女は糸をよって、緋を作りました。彼女はシルクの糸を買って、緋を織るために自分で染めていたのです。そして皆が羨むような複雑な緋を織りました。村の女性たちは、マツ・ババンが高機に座っているところを見学したものです。村のなかでも織機を持っている人はそう多くいませんでした」(B15, 258)。だがカナはその才能を受け継がなかったようだ。カナは米どころの羽地田圃のある村出身で白米を食べていたと書いたが、マツが織った着物も換金性が高かったに違いない。残念

ながら第二次世界大戦の本土決戦で、マツ・ババンの織った美しい着物はすべて消失した。

2. 3. 校歌斉唱

バーバラがインタビューした嫁B14の安里カマは高等小学校まで行った。8年学校へ通い、学校では内地語を話し、帰ると沖縄方言を話したと述べている (B14, 239)。B16玉城ウシは、休んでばかりいたが6年通っている。B15のヒガ・カナは羽地校に4年通った。学ぶことが好きだったにもかかわらず、4年しか行かせてもらえなかったという。「小学校は8時に始まり2時ごろまででした。修身、綴方、算術、地理、歴史を学びました。私たちは、内地の生徒と同じカリキュラムを習いました。校長先生は内地の人でしたが、先生の大半は若い沖縄の先生で高校か補修科の人たちでした。ミヤシロ・ギョウセイ先生に習いましたよ。彼女はいい先生でした。私のいとこや女の子の友達は高等学校まで行きました。子どもたちにいい教育を与えたいのは私が行けなかったからです。私の長女は短大を出ました。」(B15, 257) と述べている。羽地校では沖縄の若い先生が内地語で教えていた。

校歌を斉唱した花嫁がいる。1908年(明治41年)の沖縄県及島嶼町村制の施行によってそれまで越来間切と美里間切と呼ばれていたエリアはそれぞれ越来村、美里村と名称を変更した。ちょうど、1897年生まれのB06仲宗根ウシイが小学校へ入った後である。その美里村の名前が入る校歌をバーバラのリクエストに応じて歌っている。この歌が上手いという話から沖縄の歌垣ともいわれる風習、「毛遊び」と書いて、「モアソビ」、もしくは「モアシビー」と呼ばれる風習の語りへと広がっ

ていく。校歌をバーバラが採録しているので引用しよう。

私どもは美里村
名も麗しき Ritoo Ko の
生徒は毎日先生の
教えを受けて行いを
慎み守り良き人に
なりましょう (B06, 106)

美里小学校は現在もあり、その沿革を見ると1902(明治35)年に就学児童の増加により、美東尋常小学校となっている⁵。Ritooではなく、Bitooではないかと思われるのだが、美東尋常小学校は美里村からは少し遠い。現在の美里小学校、美東小学校の校歌は戦後作り直されていると思われる。ウシイは小学校4年生の頃、校歌を学んだと証言している。

なえは2年しか小学校に行っていない。ウシイは、それまで4年の義務教育であったのが、自分の頃には6年制へと拡大したと述べている。ウシイが10歳になる頃の1907年に6年制へ⁶と移行しているの、ちょうどウシイが移行期にあたる。

他にも地理、歴史、算術は「トテモハードデシタ」と言い「ゼニノカンジョウハ アイム トンチンカン」と答えている。ウシイの言葉は、沖縄方言、日本語、ピジン英語、ポルトガル語、ハワイ語のミックスで、彼女の話にあうように変えていき、英語に訳す際、

バーバラは苦労したようだ。

先生はいとこのシマブクロ先生で与儀村からきていた。アゲナ先生はとてもいやらしく、皆恐れていたという。子どもの遊びについてバーバラが聞いても、家や畑の仕事に忙しく遊ぶことはなかったと答えている。労働の後、夜遊ぶと答えた花嫁がいる。これは、沖縄の民俗・風習でも有名なモーアソビについての貴重な証言だと思われる。

2. 4. 毛遊び

小学校を卒業すると、村で道路工事が行われ、着物をくるぶしまであげて帯を結び、手ぬぐいで頭を覆い、帽子はかぶらなかった。バケツに土をいれて頭で運ぶのに、帽子は邪魔であっただろう。二人の内地人がボスでやることを指示した。昼間は働き、夜に遊びに行くのが、'moasobi' [night play] である。モアソビに関するウシイの証言を2か所引用する。

モアソビ1

小さいときからいつも歌うことが好きでした。そお、15歳までは、私はguru、良い歌い手でした。仕事と家事を終えて村に帰り、両親が夜なべをしているとき若い女の子達は「モアソビ」(夜遊び)をするために集まり歌いました。ウシイが来ないと、モアソビがおもしろくないと女友達が言うものだからね。ウシイの歌

5) 正確には、上地分校が越来尋常高等小学校、大里分校が美東尋常小学校となり美越小学校の校舎は美里尋常高等小学校となる。<https://www.fureai-cloud.jp/misato-es/home/index/annai/enkaku> 2020年7月17日アクセス。校歌をそのHPから探ることができなかった。琉球新報の「校歌探訪」シリーズで生徒たちの斉唱する校歌があるが、戦後作られたのか、ウシイが覚えている校歌とは異なっていたが、美東校という歌詞で終わる。。<https://ryukyushimpo.jp/news/preentry-248021.html> 2020年7月17日アクセス。

6) おける文部科学省ホーム・ページ学制百年史https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317568.htm 2020年7月20日アクセス

声がみんなを幸せにするのだと。

あのころは、藁の上に引いた布団で養親のおじ、お婆の間にウシイが寝ていました。お婆は「私たちのKamigwa (かわいい子) は寝ているから、あなたたちは(自分たちで) 言って遊びなさい」とウシイを誘いに来た女の子たちにいうの。Kamigwa! Kamigwa! と闇の中から呼ぶ声を聴くやいなや、布団から飛び起きて、女の子たちのところへ翔っていきましたよ。私は歌うこと大好きだったし、彼女たちもね。(B06, 107)

モアソビ2

日中は一生懸命働き、夜モアソビしに行ったと言いましたよね。両親が夜なべしている間は、男の子も女の子も一緒に遊んだものです。もちろん、女の子が大きくなると、男の子に良いように見られたいので、水たまりに行き、顔を洗いました。男に会いに行くのですから。もちろん洗顔石鹸を買うのもハード(難しい)時代でしたけど、石鹸を買って顔を洗いましたよ。かわいくみせたいからね。洗う以外、化粧することもなかったです。遊びに行き、歌いました。男の子たちの多くは、私たちの村からきていましたし、近隣のトグチ村⁷からも来ていました。道端に集まっては、三味線さんしんに合わせて歌ったものです。小さな村では、それぐらいしかすることなかったですよ。(B06, 108)

残念ながらウシイの交換写真は掲載されて

いない。バーバラが「写真のあなたは、とてもかわいいですね。そのころはボーイフレンドがいたんでしょ?」ときくと、笑って「そうだね、かわいかったね。若いころはだれでもベッピンだよ」といってウシイは笑った(B06, 108)。ウシイの証言によれば、モアソビは夜行われ、12歳で小学校を卒業し、15歳ぐらいまで男女ともに遊んでいる。歌を三味線にあわせて歌った。多くは同じ村からであるが、近隣の村からも来ており、場所は道端だったということである。

奥野彦六郎判事は、1895(明治28)年生まれであるから、ウシイとは2つしか離れていないことになる。1925(昭和元)年から奥野が那覇地裁で判事をつとめた3年間の成果の一つが『沖縄婚姻史』である。しかも「アシビ」(遊び)と称せられる沖縄の歌舞と「自由婚」についての考察をしている。「ムラの中央のいわゆるアシビナー(遊庭)で梯梧でいこの枝根をもれる月光をあびて踊ったり、人里はなれた野原に若い者だけの楽土を求めることもあった。歌舞に行くからといって別段衣装を着かえることもなく、女が化粧することもほとんどなかったのである。普段着のまま歌舞にそろうのである。」(奥野、1978: 4)と見聞をまとめている。花嫁からの証言とも一致しており、夜に、化粧をすることもなく、ウシイが寢床から抜け出したように、寢間着のまま歌舞に興じている姿が、「モアソビ」、すなわち「毛遊び」なのである。

ウシイの語りでは、バーバラ川上はmoasobiと表記しているが後述するB14安里カマの箇所ではmoashibi「モアシビ」と表記してい

7) 近隣にトグチという地名を探したが、渡具知村は、読谷村にあり、美里村の近隣とは思えない。渡久地港のある渡久地はさらに遠い。

る。この表現について宮古、八重山にいたるまで、アンケート調査をした奥野は「一般によく沖縄では若い男女の間にモーアシビ（毛遊び）があったといわれているが、その語にさえ問題がある」（同；11）という。

中頭の勝連その他できいたところでは、明治の初め頃までは、乙女ばかりでなく、若い男もヤガマヤー（夜業場）に行って三味線を弾き歌をうたっていたが、それが明治の終わり頃になると部落の十字路でいわゆる十字路遊びをするようになり、さらに後には、村落外でモーアシビ（毛遊び）をするようになって最近に及んだとのことであるから、モーアシビ（毛遊び）も過渡期の用語のように見えるのである。（同；12）

同じ中頭郡の勝連では男女が部落の十字路で、しかも村落外でもモーアシビをするようになったのは明治の終わり頃とあるという。ちょうどウシイが小学校を出た明治の終わりの光景と一致していると思われる。おなじ美里村でも10歳年上のなえの頃は乙女ばかりでやっていたのであろうか。なえは男の子とは遊んだことはないと言っている。この二人の仲宗根さんからのインタビューは、奥野の過渡期の用語であるという可能性を示しているのではないだろうか。

また、ウシイが「15歳までは」という限定をつけた箇所について、奥野は「昔は、男女とも十五歳になれば正人⁸⁾として、一人前に貢租の義務を負ったのであるが、このように

一人前になっても、なお遊びにでないようでは、親の心配の種に違いない。というのは、男女が結婚するためにも歌舞に出る必要があったからである。」（同；12）といい、イエ本位の結婚の規範ではなく、ムラ本位の結婚の規範であると主張する。同じく中頭郡の北谷^{ちやたん}では「モーアシビ（毛遊び）の間に自分の相手を選んだものである。好き嫌いや容姿、家庭の事情などからムラの男女は、自然のうちに誰と誰とが結婚するということがわかり、このような自他ともに許した相手が決まると、他のものは決して、兩人に触れないのである」（同；15）という。

普天間に1904年に生まれた安里カマも1910年代後半に経験したと想定できる「モアシビ」で出会った少年について次のように回想している。

モアシビ 3

村で過ごした若い少女時代のことを思い出すの。あの頃私が好きだった男の子がいたの。モアシビ（夜の遊び）であったのよ。それは若い人々が集まる場所で、ゲームをしたり、歌をうたって踊るの。でもデートはしなかった。私が若すぎたのね。ずいぶんと昔のことだよ。そんな思いをずっと胸の奥にしまってある。何も言わずに親にしたがってハワイにきてね。なんて残念なこと。昔はなんとこんな島にきちゃったんだらうと思ったものよ。あの男の子は村の誰かと結婚したんでしょね。第二次世界大戦で彼は死んだらしい。沖縄に帰った時、彼ら

8) 「正人とは、十五～五〇歳までの男女の課税対象者」（奥野、1978：32）の註（3）参照

を訪ねたの。彼の子供は大きくなって働いているのを見て嬉しかったですよ。元気でやっていたんでね (B14, 252)

普天間の北はすぐ中頭郡である。奥野彦六郎の『沖縄婚姻史』によれば、「中頭地方宜野湾」におけるモーアシビが結婚にいたったかどうかについて次のように回答があった。「古くはシマ（部落）の青年男女は上流のわずかの例外を除いて、盛んに毛遊びをやった。そして上流家庭の男女は親同志の相談によって結合したが、大多数は毛遊びで恋におちそれが結婚にまで導いた」（奥野、1978；21）とある。ところが、後述するB15ヒガ・カナの出身地国頭郡羽地では「昔時毛遊びの結果結婚したのは一割にもあたらない。そのようなを偶成女夫ぐないみとうという」（同）とあり、階級によって、地域によっては、モーアシビが必ずしも結婚に結び付いたわけではない。少なくとも、写真花嫁たちの証言から1910年代半ばから1920年代前半に写真婚した彼女たちは、だれも毛遊びで婚姻してはいない。親が決めた結婚相手に写真を交換して嫁いでいる。

井谷泰彦著「モーアシビ（毛遊び）と風俗改良運動に関する一考察」（2012）によると、日露戦争後に国民統合を目指す「地方改良運動」が始まってから沖縄のモーアシビはこの「風俗改良運動」のやり玉に挙げられたという。だが、「国家主導型の近代化」である風俗改良運動によってモーアシビの習慣が根絶したわけではない（井谷、2012）。

本土の規範に「風俗」をあわせようという国民統合は、シマとよばれるムラの規範を優先する風俗とは相いれない。井谷は1898（明治31）年に徴兵制度が沖縄に実施されると、

検査前に「対象となる男子を連日連夜、モーアシビに連れ出し睡眠不足などで痩せ衰えさせ不合格になるように仕組んだ地域も多い」と『糸満市史 資料編12』（糸満市役所、1971；236）から引用している（井谷、2012；133）。「国家主導型の近代化」への抵抗としてモーアシビは活用されたのだ。また、井谷は「15歳以上の女性が頭に置いて者を運ぶと札」を渡されて罰金を払うという「滑稽な条項」を紹介している（同；135）が、もれなくバーバラがインタビューした写真花嫁たちは頭でバランスをとりながら重い物を運んだと証言している。

奥野が主張するようにモーアシビに端緒がみられる「自由婚」は、シマとよばれる集落の閉鎖性ゆえに成立する。だが、1900年以降、移民や花嫁としてシマから若者が流出しては、もはや成り立たなくなるのは時間の問題であっただろう。井谷は移民については全くふれていないが、モーアシビが衰退していった理由として第一に「集落（シマ）でモーアシビを担う年齢人口が減少」したことが、この風俗を絶滅に導いた一つの理由であり、第二の理由は社会構造の変化にともない村落共同体そのものが崩壊していったからだと言う。それは、村落内婚の伝統が崩れ去っていったことを意味し、井谷はまとめとして『沖縄県史』と同じように「沖縄本島では、大正中頃には村内婚の伝統が消えた」（同；138）とする。その『沖縄県史』は、女子の高等女学校卒業者が農民の間からでもでてきたこと、「それまでの閉鎖的な農村が解放的となり、若い男女の交友範囲も広くなると、自然とそれまで連綿と、しかも強固につづいていた村内婚の伝統が崩れさっていった。それでも村内婚

の伝統が形の上からも実質的に消えたのは大正中期」(『沖縄県史』22巻;521)であるとしている。

14年ほどしかなかった大正時代の中期といえ、1918年頃であろう。だが、1904年生まれのカマがハワイへ来たのは大正9(1920)年であり、大正中期にモーアシビが廃れるというのは時期尚早ではないか。写真婚は、モーアシビが立脚する村落内婚という意味では旧慣を維持する方向で活用されたといえるからだ。モーアシビという風習がない本土においても、同じ郷里から花嫁が選ばれていることから、村落内婚という規範という意味においては内地と沖縄では差はなかったといえる。

2. 5. 結婚式

『沖縄県史 民俗』22巻の218頁に「単なる推定にすぎないが、三三九度の盃の交換は明治以後に普及した習俗のようだ。」とある。沖縄で結婚式をあげるようになった2名の写真花嫁の聞き取りからは、酒とご馳走はでてくるものの、三三九度については言及がない。内地の花嫁で婿がハワイにいるにもかかわらず祝言をあげた花嫁たちは三三九度に必ず言及している。紋付の着物と、三三九度はプランテーションでの結婚式に沖縄の花嫁が参加して初めて「発見された伝統」なのではないだろうか。

B06のウシイはある日、母に「今日はあなたの結婚式よ」(B06, 109)と言われ、畑に仕事に行く着物より「チットビット」よい着物を着て、髪をカンブーという沖縄独特の髪結いをし、簪のjifua(ジーファー)を差した。11歳年上のフィアンセ仲宗根松吉の継母がスペイン風邪で急逝したため、1914(大正3)

年にハワイから松吉は沖縄へ戻ってきた。喪に服すなどと流暢なことをいっていらなかった。なぜなら長く松吉が沖縄に滞在すると徴兵される可能性があったからだ。沖縄に徴兵令がでたのは本土よりも遅く、ウシイが生まれた翌年の1898(明治31)年であった。

30人ぐらいの親戚と友人が結婚式に参加した。結婚式の食事はハワイと違い質素だったという。煮しめ、豚肉、豆腐、かまぼこなどが並び、泡盛で祝った(同)。

1923(大正12)年にハワイへ渡ったB16玉城ウシも那覇市の国場で小さな宴会をした。バーバラは、内地との違いもウシに語らせている。本土からの花嫁のように紋付を着なかったと。

ブライダル・コーディネーターになったB10皆合シズは、「カウアイ島では、沖縄の人々から人気の紋を自分の紋として選んでほしいとよく言われました。彼らは正式な着物に紋が欲しかったのです。変わったことだともおもいましたよ。だって日本では家の紋は代々その家に受け継がれているものですから。古き沖縄では、宮廷の方々と士族は家紋を持っていたんですけど、一般の人は、家紋をもっていなかったようです。家具はあったんですけど。」(B10, 190)と語っている。シズに娘のために紋を選んでほしいと日系の人々もリクエストするようになったという。母親がハワイへ紋付をもってこなかったことが原因だとシズは述べている。日系二世が、ウェディングドレスではなく、「伝統的な花嫁衣裳」を身につけたがるのは、地域・階級を超えて「発見された伝統」に「日本人」的アイデンティティを求めたといえるであろう。

沖縄出身の二世、三世の花嫁姿が掲載され

ていないのは、残念である。沖縄からの花嫁はプランテーションで初めて、内地式の結婚式を見たと思われる。そこで花嫁が身に着ける紋付、あるいは親族が身に着ける紋付をもって「憧れ」を抱いたとしても不思議ではない。本土出身の花嫁ですら、花嫁衣裳を身にまとえたのはごく少数でしかなかった。娘たちに家紋入りの花嫁衣裳を着せてやろうとするのは、本土出身でも沖縄出身でも変わらなかったのか、沖縄の上流階級の花嫁衣裳を二世、三世に着せたのか、残念ながら、『ハワイ日系移民の服飾史』にも詳しくは記されていない。だが写真花嫁自身が「紋付を着て結婚写真をとった数少ない沖縄人花嫁のひとりになる。彼女はホノルルに着いたのち紋付を買った。1921年8月。アラカキ・マス所蔵」(川上、1988:39)と内地の風習を取り入れた写真花嫁の1枚が収められている。

国場のウシは、よそ行きの着物と帯、簡単な髪結いをした (B16, 273)。婿はハワイにいるが、夫の家へ嫁として入るとき、女友達が花嫁の周りを囲み、花嫁の顔が見えないようにした。彼女たちは、手織りの簡単なよそ行きの着物や、カラフルな緋や芭蕉布、紬などの着物を着ていた。ご馳走やお酒がふるまわれたが、その当時の沖縄では、内地の人がハワイでするようにお寿司はなく、赤飯で、醤油で味付けした豚肉やお豆腐の天ぷら、豚肉とかまぼこがそれぞれ2切れ、「オソナエ・モン (サイドデッシュと訳語が当てられている)、ソーメンとナマスが出されました」(B16, 274) という。

『沖縄県史』によれば、沖縄の婚姻の民俗は階級・地域の差によって、多種多様であるが、庶民の貧しい婚姻儀礼は簡単であったが、次

第に複雑化して、披露宴ということが重んぜられ、親類縁者への披露、村人への披露と、披露の範囲が拡大され、しかも盛大になっていった。一方、また、通い婚型の婚姻が衰えて、士族社会の婚姻風習だった嫁入婚型の婚姻様式が庶民の間まで普及した (『沖縄県史』22巻; 530) とある。

柳田國男の門下で1895年生まれ、瀬川清子は、1954 (昭和34) 年まだ沖縄が本土復帰していないときに沖縄の古老をたずねて民俗・風習を採録し『沖縄の婚姻』にまとめている。瀬川はバーバラがインタビューした花嫁たちと同じ出生コーホートということになる。彼女の採訪よりももっと古い30年も前の現地の人の報告として比嘉春潮氏が美里村に近い越来地方の風習について次のように語っているといっている。1924年頃の報告というのは、バーバラがインタビューした花嫁たちの風習と考えていいだろう。「結婚の日の午後、新郎は聳ぞういと聳入り。新郎の家では、隣家または親類の家を借りて根引座(に一びちぎ)に十四、五名の友人を招く。放歌乱舞す。嫁入りに嫁の女友達が十四、五名ついてゆくのが連れ人数、その中の最も親しい四、五人が素泊まり人数で、式後嫁と共に婚家に一泊する。以下略」(瀬川、1969:77) と若者仲間の重要性が描かれている。なお、この地方では「大正三、四年ごろまでは子ができるまでは嫁は必ず里方にいた。二人もめずらしくなかった。子が一人できただけで夫方に移ると、『もうゆくのか』といった。『孫一人やしなえないか』といって、娘のうんだ子を養うのが、親の義務だった。男一聳に責任をもたせられない、という観念があった (比嘉春潮氏)」(同; 100) という。

つまり結婚後も花嫁は実家に留まり、花婿のほうに通ってくるという習俗があったが、ハワイに聳がいては、この風習にも変化を及ぼしたと思われる。1912、3年頃までというのは、越来の隣の美里村から仲宗根ウシが1914年にハワイに渡っていることから、沖縄から写真花嫁として大量に流出するころまで、とも考えられるのではないだろうか。

毛遊びの箇所でも前述したように、『沖縄県史』では、大正の中期に村内婚が消えたとしているが、バーバラがインタビューした写真花嫁は、ほぼ村内婚といい。だが、夫はハワイにいるゆえに、伝統的な妻問い婚、通い婚ができないという物理的な条件が、次第に嫁入り婚へと変化した要因であるとも考えられる。大正中期に結婚した写真花嫁の行動は、同じ村の者と一緒に花嫁として海を渡り、現地に着くと同じ村の女性たちがプランテーションにはいる。嫁いだ先はハワイとはいえ、同じ村の人たちが支え合っている。それでも親族がないハワイはとても寂しいと語る花嫁は多い。例えば、安里カマは、夫のプランテーションにつくと、同じ字普天間から来た女性たちが3人いて、初めての野良仕事への仕事着と身に着けるものをつくってくれた。村内婚は消失どころか、海を越えてその機能を維持したといえる。

沖縄の村育ちの娘たちが、ハワイへ行く船で内地の写真花嫁と出会い、プランテーション先でも内地の人たちと出会う。それまで内地にすら行ったことのない娘たちは、文字通り井の中の蛙、大海にほうり投げられた。次節では、掲載されている写真と花嫁たちの「語り」から内地（人）とのエンカウンターについて分析したい。

3. 内地との出会い（エンカウンター）

3. 1. 写真にみる内地化

仲宗根ウシイは18歳のときに夫の写真をみる。「それから若い女の子としてハワイに行くことを夢見ました、沖縄へ帰ってきた人々からハワイは天国の島で、お金をたくさん儲けられると聞きました。ハワイから持って帰った写真を見せるために彼らは来たのです。沖縄の娘も美しい着物、内地の様な着物を着てかわいく映っていました。村では、沖縄の女の子は着物を足くびよりも数センチ挙げて着つけ、帯を前に結んで、娼婦のように垂らすのですよ」(B06, 108) と述べている。つまり、内地人に出会う前から内地化した沖縄の女性の着付けを写真でみて「オシャレ」だと思い憧れていた。

普天間のB14カマの交換用の写真（B14, 242）は、沖縄の薄いイグサの座布団に正座をしているという珍しいポージングである。『ハワイ日系移民の服飾史 緋からパラカへ』にも同じ写真が掲載され、服飾に着眼したキャプションが添えられている。「これを写した時、カマは十六歳だった。白い襦袢の上に手のこんだ織りの緋の着物を着ている。1920年。アサト・カマ所蔵」（川上、1998：64）とある。床は、タイルだろうか、それともゴザの織なのか判別できないがモダンな幾何学模様である。背景はおそらく描かれている障子も本土のものとは異なる。カンブーに結われた髪型といい、手の込んだ緋の文様といい「よそ行き」を着ていることがわかる。もう一枚カマがハワイへ立つ直前に、彼女の祖母と同じ写真館で撮影されたものも掲載されている。床が同じである。白髪の祖母は椅子に腰かけ、

二人とも帯が見えない。祖母は右前に、カマは左前に着物を着ている。カマはカンブーには結っておらず、ほつれ髪がある。祖母は裸足である。

カマの夫になる安里カメイの写真も、床のパターンと障子から同じ写真館でハワイへ行く前の1919（大正7）年に撮影されている。着物姿で、まだ16歳か17歳の頃で、あどけなさが残る。だが、足元は写っておらず、着物の丈もわからない（B14、242）。

カマも女の友達と写真館に取りに行ったと証言しているが、複数うつっている写真もある。「沖縄におけるカナ・ナカオと友達」（B15、258）というキャプションで、椅子に腰かけた二人は裸足に草履をはいている。左側の女の子は足くるぶしがみえるが、右側の女の子は長めに着付けているようだ。手もとにはハンカチを広げている。立っている女の子の着丈は短めで、前に黒い帯が結ばれている。内地のような縦縞模様ではなく、緋のようだ。髪は3人とも綺麗にカンブーを結っているが、視線はバラバラである。どの女の子がカナかはわからない。

沖縄の女性の写真で最も違和感があったのは、玉城ウシの写真である。カンブーではなく、庇髪であり、一見、内地の女性の写真と変わらない。キャプションには「ウシ・カカズの交換写真、1923年に玉城ジンタロウとお見合いがきまったときに撮ったもの。縦縞の絹の着物に、緋の羽織は沖縄の写真屋の方に借りたもの」（B16、272）とあり、貧しかったので写真館で内地の着物を借りたのだと判明する。裸足かどうか、内地風にくるぶしを隠して着付けてあるので、確認ができない。

ウシは、ホノルルへ移ることになるのだが、

ビッグ・アイランドでは靴を履いている一世の女性など見たことなかった。皆下駄をはいていたからである。ホノルルでは一世の女性がおしゃれに着こなしていることに気が付く。Hind-Clarke Dairyという牛乳を扱う会社に夫のジンタロウが就職し、初めて西洋的なドレスに、靴を履き、T型フォードの前で子たちとウシが写っている（B16、276）。内地化を飛び越えて西洋化している。

写真花嫁用の写真は掲載されていないのであるが、ハワイで軍人の家族のところで家事使用人をしていたときの仲宗根ウシイが、和傘をさし、浴衣姿で掲載されている。（B06、113）

また、家族写真のなかで、内地風の縦縞の着物と帯さらに足袋をはいたウシイが5人の子どもと夫松吉とともに収まっている（B06、114）。内地化していく様子が、掲載されている写真からわかる。

3. 2. 船上での出会い・プランテーションでの出会い

1920（大正9）年ハワイ航路において内地人は8年学校へ通った普天間のカマに話しかけてこなかった。

横浜まで行きましたが、思ったほど寂しくはなかったです。他にも私のような親に結婚を決められた写真花嫁が大勢いたからです。横浜で多くの内地の女性が乗船してきました。すぐに違いに気づきました。着物と髪型です。内地の花嫁は、沖縄の花嫁には話しかけませんでした。ただ見ているだけです。内地の花嫁のなかには、私達の赤や黄色の（紅型）

の緋の織物の着物を羨ましいとっている人もいました。彼女は私たちのことを変だと思ったでしょう。沖縄の女性たちは、くるぶしよりも高く着物をたくしあげ、帯は内地の娼婦のように前で結んでいたのですから。内地の花嫁は着物からくるぶしをださないように長い丈で着付けていましたし、太鼓帯は後ろで結んでいました。

もっとも大きな違いは手の入れ墨だと思えます。それは既婚者の印でした。内地の花嫁の大半は田舎の農村からきていますので、沖縄の写真花嫁をみるのは新しい経験だったのです。彼女たちは、文化的違いを理解することはできませんでした。(B14, 243)

『ハワイ日系移民の服飾史』(1998=1993)にはさらに詳しい入れ墨の記述と解説がある。「カネシロ・カマド。彼女は1907年7月5日に夫のジロウと一緒にハワイに着き、ハワイ島のククイハエレに落ちついた。彼女は沖縄で結婚前に入れ墨を入れた。左右の手のデザインは同じ。カマドは孫のウェイン・カネシロを抱いている。1944年8月。アーサー・T・カネシロ所蔵」(川上、1998:41)と入れ墨がはっきりとわかる写真のキャプションがある。鳥越がインタビューした自由移民時代の女性はくっきりと入れ墨をしている。だが、ピクチャー・ブライド・ストーリーズにでてくる女性たちの手に入れ墨があるかは確認が難しい。

バーバラはツカモト(津加本)・カナにインタビューしたとき、彼女の入れ墨がバーバラが幼少期にプランテーションで見た入れ墨よ

りも薄く、ひかえめなことに気づく。「かつて彼女が郷里の北谷村の習慣にしたがって手に入れ墨をしている途中で、彼女の兄—台湾で教師をしていたが、戻ってきていた—が『お前は入れ墨をした台湾の山地の人みたいだよ』とって止めさせた。彼女はハワイに来て、その時、兄が止めてくれたことをよかったと思っていると、私に話してくれた。」(同;41-42)とある。残念ながら、このツカモト・カナが何年生まれなのか、何年にハワイに来たのか不明である。「近代化」政策として明治政府に1899年に入れ墨(針突^{ハジチ})は禁止されたが、まだその後も続いていたことを物語る。だが、帝国植民地である台湾からもどった兄の眼差しによって、旧慣の相対化が起こり、劣位であるとみなされるものについては、自ら消し込んでいく様子がかがえる。沖縄風の帯が「娼婦」を内地人に連想させたように、入れ墨は内地人に「罪人」を連想させることが、内地人とのエンカウンターによって、風習を変化させる要因になっているといえる。

1922(大正11)年ヒガ・カナは、次のハワイ行の船が出るまで横浜で居留していたとき、福島的女性に出会う。「彼女は少し寂しそうでした。彼女の夫は子供と彼女を残して先にハワイに行くところだったからです。子どもも連れて行きたかったのに、義母がそれを許さず、子どものための枕を私に貸してくれました」(B15, 259-260)と、内地の女性と会話をしている。さらに、ハワイ到着時、下船に際して福島的女性に内地風に沖縄より幅広の帯で着物を着付けてもらっている。同じ村からの他の女の子は、赤と黄色の紅型のカラフルなきものを着た娘もいた。芭蕉布を纏った花嫁もいた。カナに内地風の着付けが可能だっ

たもう一つの理由は、あのマツ・ババンにある。「彼女は那覇の特別な着物屋に連れて行ってくれました。そこは内地の着物を輸入していたの。それは美しい銘仙の絹の着物でした。羽二重の羽織で、とても高価だった。嫁入り道具のひとつとして、重い敷布団までもってきたの、信じられる？」(B15, 261) という証言からもわかるように、内地の着物を持ってきていた沖縄の女性がいるのである。内地の花嫁でも布団を持ってきたのは限られた裕福な階層であったが、カナが沖縄ではその裕福な階層だということがここからもわかる。

ところがカナは、ハワイで夫の借金に苦しむ。夫の給料はほぼ借金やつけで買った返済に消え、また新たなつけで買わなければならない。どこもつけで買わせてくれなくなるが、これまた福島のサンペイさんだけはつけで買わせてくれたという (B15, 265)。

カナ、カマ、ウシイも述べていたが、沖縄の花嫁は帯を前で結び、それがまるで内地の「娼婦」のようであり、内地の写真花嫁は沖縄の女性の着付けを娼婦とみなしあざ笑っていたという (同)。娼婦には必ず 'courtesans' が使われていることから、花魁をイメージしているのであろう。この沖縄の帯を前に結ぶ着付けが内地の遊女を連想するという発言は、内地の女性たちに見下されたという印象をもったということでもある。

そもそも内地の女性と言葉が通じたのだろうか？ という疑問もわくが、小学校では「内地語」を教えてもらっていたとの証言から、カナは花嫁のなかでも4年しか小学校に行かせてもらっていないが、内地言葉と沖縄方言を使いわけることが可能なぐらい、内地化は徹底されていたのかもしれない。

内地の女性に親切にされたカナのようなケースもあれば、カマのように話しかけられなかったという経験までさまざまである。ただ、内地人の女性の偏見を通して、自分たちを低く位置づけることを覚えていく。それは同じ村だけの女の子としか遊んだことのない彼女たちからすれば、最初のエンカウンターでどのように位置づけられているのかを敏感に感じ取っていた。では嫁ぎ先のプランテーションではどのような経験をしたのであろうか。

オアフ・シュガー・カンパニーに働くことになった安里カマは、そこで意地悪な内地からの隣人をもつことになる。沖縄からきたというだけでいじめを特定の人物から受けた。「台所へ行くのに同じ通路を取るのだけど、彼女はいつもひどいことをいってきた。でも一言も言い返さなかった」(B14, 246)。しばらくして、西キャンプへ移動した。そこにも内地の人がいたけれど、彼らはみんないい人たちで、多くの内地の友人を得たという。それを聞いたバーバラは、嬉しかったと記している。そして、バーバラの母は「いつも子どもたちに沖縄の人には親切にきなさい。内地の人とかわりませんと主張していた」(B14, 247) ことを思い出している。逆に言うと、沖縄の人に親切にしなかった内地人も多いということであろう。

下船時に内地風に福島の女性に着つけてもらったカナは、お産のときでも内地の産婆に助けられている。石川セツという新潟県出身で産婆学校を卒業し、戦前ではトレーニングをうけた数少ない産婆であった。石川さんは出産の痛みを和らげる特別な技術をもっていて、やさしく背中やお腹をマッサージしてくれた。カナは4番目の子どもを産んだとき、

母乳がでなかった。石川さんは、長女のルースにお湯を沸し、砂糖をいれるようにいった。それをガーゼにふくませ、赤ちゃんの口に入れた。赤ちゃんは砂糖水を吸うので、カナのミルクがでるまで吸い続けた。カナの夫、コーホーは石川さんと娘のフジコを取り出すのを手伝った（B15, 262）という。

玉城ウシは「Wailupe（現在 Aina Haina）に暮らしていた時も、近所には内地の方がいましたが、皆親切で、近くに住んでいます、今でもいいお友達ですよ。ホノルルに引っ越してきてから、多くの内地のお友達をつくりました」（B16, 279）と述べている。

結論

沖縄の花嫁だけをまとめて取り上げたが、民俗学的にも貴重な証言が含まれていることが明らかとなった。

安里進ほか著の『沖縄県の歴史』によると、1920年代から30年代初頭までの経済不況＝「ソテツ地獄」は、第一次世界大戦後の日本資本主義をおそった世界恐慌の沖縄的発現形態として以下の4点をあげている。

第一にプランテーション農業に依拠した製糖資本が資本主義的方式で分糖などを生産し、世界の砂糖生産の大半を支配した時期に、沖縄だけは零細農民の経営による含蜜糖（黒糖）生産を主としたことと、第二に、第一次世界大戦前後の世界の砂糖需要構造が輸出国のダンピングなどによって変化し、砂糖の国際市場価格が低迷したこと、第三に、黒糖需要度の高い日本全国の農村が不況により疲弊

し、黒糖の需要量を減少させたこと、第四に、沖縄は商品経済への依存度が高く、諸産業の生産力が他府県に比べて低い水準にあったことなどである。（『沖縄県の歴史』、2004；278）

本稿で明らかにしたように、花嫁たちが商品経済のなかでも砂糖だけでなく模造パナマ帽子製造にもかかわっていた。ここに皮肉な循環がみられる。沖縄が移民を送り出すのが20世紀初頭であり、それまでムラの人の無償で相互の協力は、移民の隆盛とともに衰退している。それは、村内婚の伝統やモーアシビー（毛遊び）の風習の存続に大きな影響を与えたと考えられる。花嫁たちは定住家族の一員として砂糖黍畑で働きながら、沖縄では零細農業の労働力として働いていた。だが、次第にそこでの男性の労働は、娘たちが編む模造パナマ帽男性用1個より安い賃金で「買う」ようになる。その零細農業から抜け出すためにハワイへいくものの、同じ砂糖黍畑で大規模な資本主義的経営のプランテーションで働くことになる。働き手が流出すればするほど、無償の相互協力ではなく、より貧しい人を雇うことになる。ハワイからの送金も使われたであろう。模造パナマ帽は内地だけでなく、世界に輸出された可能性もある。おそらく沖縄、台湾だけでなく、日本が支配下においた南洋の女性たちも編んでいたと思われる。沖縄の女性たちが織ったストロー・ハットをハワイの砂糖プランテーションで、移民たちが被っていたかもしれない。

本土からの写真花嫁たちも、プランテーションで働くが、沖縄からみると、その商品経済上の砂糖との関連がより鮮明に理解でき

る。バーバラ川上の Picture Bride Stories から、定位家族に関する部分のみの紹介を通して、移民する前の庶民の生活に着眼してきたが、北は福島から、南は沖縄までカバーしているということが、どれだけ貴重なストーリーズかがおわかりいただけるであろう。ぜひ多くの方に原著を手にとっていただきたい。彼女たちがハワイで形成する生殖家族の物語も大変示唆に富んでいる。

麦わら帽子を編むことで、畑仕事を回避していたカマは、62歳でリタイアするまでずっとプランテーションで働いた。246頁に掲載されている写真のキャプションには「安里カマ（左）と熊坂カク（右）は、オアフ・シュガー・カンパニーの砂糖黍畑で雇われていた最後の2人の一世の女性たちである。熊坂カクは、32年近くその会社で働いた後、1964年に早期退職した。」(B13, 246) とある。B01福島出身のカクは、カマの2年後の1922年にハワイに来ている。おそろいのチェックの上着、麦わら帽子、仲良く手を握って、二人とも笑顔だ。ハワイのプランテーション・ビレッジ・コレクションの1枚である。ハッピーコウという「サトウキビ運び。力のいる仕事で、ふつうは成人男性がする。やや収入がよい」(鳥越、1988: 39) という作業も、「カクさんと私は一世の女性でハッピーコウができる最後の女性たち」(B13, 247) になったという。

一方で、移民先での内地人との出会いは、より「沖縄の伝統」への回帰も同時に生み出していった。若いころは働いてばかりいたので、リタイア後にサンシンを習ったり、踊ったりすることをヒガ・カナは楽しんでいる(B15, 253-254)。

特に、写真花嫁がピークとなる1910年から

1920年代は、多くの日本人移民が海外へ渡っていった。日本における近代化は、移民先の文化との連動のうえに築き上げられたのではないだろうか。

【参考文献】

- 安里進ほか著 (2004) 『沖縄県の歴史』山川出版社
- 石川友紀 (1997) 『日本移民の地理学的研究：沖縄・広島・山口』榕樹書林
- 石川友紀 (2013) 『北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究：ハワイ一世移民の現地調査例を中心に (1)』『移民研究』(9): 41-62
- 井谷泰彦 (2013) 「モーアシビ(毛遊び)・と風俗改良運動に関する一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』20-2, 129-140
- 井谷 泰彦 (2014) 「沖縄のモーアシビ(毛遊び)に見る『習俗としての教育』-その教育的役割と機能-」『社会教育学研究』50 (1), 1-10
- 『沖縄県史 経済 3』琉球政府編、国書刊行会, 1972=1989
- 『沖縄県史 民俗 1』22 沖縄県教育委員会, 1972=1989
- 『沖縄県史 民俗 2』23 沖縄県教育委員会, 1973=1989
- 奥野彦六郎 (1978) 『沖縄婚姻史』国書刊行会
- 嘉本伊都子 (2019) 「海を渡る花嫁への一考察 (1) - バーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通して-」『現代社会研究』21: 67-83
- 嘉本伊都子 (2020) 「海を渡る花嫁への一考察 (2) - バーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通して-」『現代社会研究』21: 69-87
- 川上, バーバラ・F (香月洋一郎訳) (1998=1993) 『ハワイ日系移民の服飾史 緋からパラカへ』(神奈川大学常民文化叢書5)、平凡社=Kawakami, Barbara F., *Japanese Immigrant Clothing in Hawaii, 1885-1941*, University of Hawai'i Press, 1993
- 島岡宏 (1978) 『ハワイ移民の歴史：新天地を求めた苦難の道』国書刊行会
- 瀬川清子 (1969) 『沖縄の婚姻 (民俗・民藝双書47)』岩崎美術社
- 大丸弘・高橋晴子 (2016) 『日本人のすがたと暮らし 明治・大正・昭和前期の身装』三元社
- ロナルド・タカキ著；富田虎男, 白井洋子訳 (1986=1985) 『パウ・ハナ：ハワイ移民の社会史』刀水書房
- 鳥越皓之 (1988) 『沖縄ハワイ移民一世の記録』中央公論社
- 鳥越皓之 (2013) 『琉球国の滅亡とハワイ移民』吉川弘文館
- 四方田 雅史 (2003) 「模造パナマ帽をめぐる産地間競争：戦前期台湾・沖縄の産地形態の比較を通じて」『社会経済史学』69 (2), 169-188

英文

Kawakami, Barbara F., (2016) *Picture Bride Stories*, University of Hawai'i Press